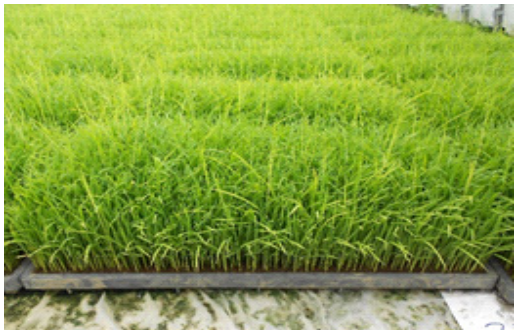
vol.544

mj "高品質力、信頼性、情報はマック"
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス株式会社

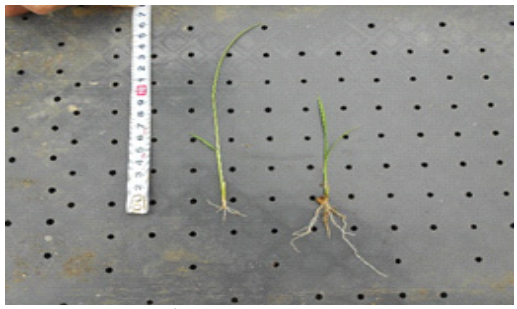
◆ 2019年5月15日発行ラインナップ
・病害虫発生予報第一号発表
・全国のお茶産地

病害虫発生予報第一号発表

農水省は4月17日に向こう1ヶ月間の主要な病害虫の発生予察情報を発信している。発信の通り、各地域において被害や対処が報告されてきつつある。水稲においてはいもち病・もみ枯れ細菌病・ばか苗病が注意喚起されているが青森県ではもみ枯れ細菌病が、関東では千葉県・茨城県でばか苗病の発生が多く報告されている。千葉県においては一部の薬剤に耐性菌が出ており効かないとの注意もなされているようだ。昨年ばか苗病が発生したにも拘わらず抜き取り作業を怠ったり、罹病した自家採取種子を利用し対応薬剤処理が甘かった生産者は多発している。ばか苗病の発生が多いと耳にした地域は次年度の対策を忘れず留意しておきたいところだ。また昨年の水稲は登熟が悪く種子の充実具合がよくなかったせいか塩水選をしたら浮き籾が多かった。浸漬作業も例年よりじっくり行ったところ発芽勢がよかったという声も聞いている。基本を忠実に作業を実行された生産者の苗は良い状況なのだが、育苗期間中は寒暖差が大きかったせいと合間に降雨に見舞われた地域においては苗が弱くて伸びにくくなっており病気に掛かりやすい環境でもあったようだ。苗半作とも言われるので移植以降の生育に注意が必要だ。



ばか苗の発生



左：ばか苗病株　右：正常株
葉齢：２葉期

また、千葉県では九州等、西日本地域で見られるスクミリンゴガイ（通称ジャンボタニシ）が多発の恐れがあるとして5月13日に注意報第1号が発令されている。ジャンボタニシは食用として持ち込まれたものなのだが、可食部の身は臭みが取れにくく結局は食用に見合わず養殖していたものが逃げ出して広まったと言われている。関東以東地域の方はあまり見かけた事がないと思うのだが、イネの株元や側溝等にピンク色の卵を産み付け、4葉期位までの茎葉が固くない若い苗を食害する。卵ともども見た目もよろしくない巻貝なのだが特に今年は九十九里沿岸部において多く、見取り調査では過去10年と比較して最も高く被害が出ている。これは12月から2月までの平均気温が高く、スクミリンゴガイが越冬しやすい条件となっていたようでここにも温暖化の影響が出ているようだ。本田処理剤として殺貝剤もあるのだが、発生地域では次年度に繁殖させないため水口や水尻に網を張り、侵入を防ぐよう対策を講じる事をお勧めしたい。麦類においては赤カビ病の発生が懸念されるとの事で出穂期に適用薬剤を散布したもののその後に降雨に見舞われた地域も多く、薬剤が流れて効いてない可能性が高いという事で群馬県の前橋や伊勢崎等では再度赤カビ防除を勧める地域もあるようだ。また、同地域においてはアブラムシの発生も多い。アブラムシはウイルスの媒介でこれが他作物に移っていく可能性もあり、2次被害も懸念されている。野菜類においては終盤のハウスや露地イチゴの灰色カビ病、タマネギのベト病に注意が必要だ。タマネギのベト病については面倒でも来年作に影響を残さないため収穫前には発病株の抜き取り等、こまめな対応が望まれる。果樹類においてはカメムシの発生が南関東や中国の一部の地域で多くなるとの予報がある。昨年夏以降に成虫の発生が多かった場合には越冬している可能性が高く注意が必要であろう。また、青森県等北東地方におけるりんごの産地においては黒星病の発生が多くな

（次ページへ続く）

(前ページより続く)

ると言われている。年々深刻な話は聞こえて来ているが、一部の薬剤に対して耐性菌が発生しているようなので効果的な防除が必要となっている。4月に降雪、遅霜、寒暖差が激しいとその年の農作物の生育に最後まで影響が残る。今後も予断ならない天候不順があることを想定した肥培管理が必要となってくるため今年は肥料商のきめ細かい栽培指導がモノを言うのではないだろうか。各都道府県が発表する病害虫の発生予報には注意をもって接して頂きたい。

都道府県病害虫防除所

URL:http://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/boujyo/120105_boujosho.html

---

全国のお茶産地

5月1日、平成から令和に改元された。令和の典拠は、日本最古の歌集である万葉集に収められた梅花の歌三十二首　序文にあると発表された。令和のゆかりの地として、福岡県太宰府市の坂本八幡宮に多くの人が訪れている。新しい元号が始まったこの時季、九州の各県では一番茶の摘採・出荷が始まっている。今年度産の一番茶の生育は、好天に恵まれ霜の被害もなく順調に推移。味・色・香りの三拍子揃ったお茶に仕上がっている。

お茶と言えば静岡や京都のイメージが強いが、九州もお茶の主産県である。栽培面積、生産量共に全国値に対し、九州6県の割合は、栽培面積：3割、生産量：4割を占めている。下表の通り、栽培面積は徐々に減少傾向にあり、14～15年程前は50,000ha程あったのが現在では41,500haとなっている。茶の樹齢が長くなり老園化してくると収量や品質の低下が懸念される。そのような場合、新しい木に入れ替える事で生産量を維持されている。減少要因の1つとして、お茶農家の高齢化や後継者不足というのも考えられるのではないか。この点は、お茶に限らず農業全体が抱える大きな問題でもある。生産量については、平成16年産で10万トンを超える時期があったが、その後徐々に減少し現在では8万トン台。ただ平成30年では、面積は減っているものの生産量は83,600トンと伸長した。これは主産地である静岡、鹿児島において、天候に恵まれ生育が順調に進んだ事によるものである。

○お茶の主産県(11府県) 各年毎の栽培面積

単位:ha

順位	府県名	H28年	H29年	H30年
1	静岡	17,400	17,100	16,500
2	鹿児島	8,520	8,430	8,410
3	三重	3,000	2,950	2,880
4	京都	1,580	1,570	1,570
5	福岡	1,550	1,550	1,540
6	宮崎	1,420	1,410	1,390
7	熊本	1,350	1,300	1,260
8	埼玉	884	871	855
9	佐賀	866	841	795
10	長崎	750	747	742
11	愛知	542	538	521
-	全国	43,100	42,400	41,500

出典:農林水産省　耕地及び作付面積統計

○お茶の主産県の生産量

単位:t

府県名	H28年	H29年	H30年
静岡	30,700	30,800	33,400
鹿児島	24,600	26,600	28,100
三重	6,370	6,130	6,240
宮崎	3,760	3,770	3,800
京都	3,190	3,160	3,070
福岡	1,870	1,920	1,890
奈良	1,720	1,710	…
熊本	1,280	1,290	1,260
佐賀	1,240	1,170	1,270
愛知	914	880	863
長崎	775	718	733
埼玉	652	698	898
全国	80,200	82,000	86,300

出典:農林水産省　作物統計

お茶の価格については、ペットボトル緑茶飲料の需要増加に牽引されるように上昇傾向にあった時期もあったが、現状は低迷。茶葉を買い、急須で淹れるという日本の暮らしに欠かせないものだが、今一度再認識する事で、お茶の価格が盛り上がって欲しいものだ。お茶は、お湯の温度や浸す時間等で味に大きな違いが出てくる。美味しいお茶を淹れる為には、それなりのテクニックが必要となるが、美味しいお茶を淹れる為に工夫を凝らす時間を設けてみてはいかがだろうか。茶葉の入った急須を洗うのが面倒と思われるかもしれないが、そのちょっとしたひとときを楽しむゆとりを持てるようにしたいものだ。それが茶葉の消費増加に繋がるものと願いたい。(福岡支店)

この大型連休はいかがお過ごしでしたか？10日間も休みがあるので大掛かりな家事をやるつもりでいましたが、気付けば最終日でした。長すぎても動けないものですね。　　編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail： macjournal@mcagri.co.jp　URL http://www.mcagri.jp